

Mr. Bassman (ベースマン列伝) Vol.68

ジャズにおいてベース弾きとは、縁の下の力持ち、水先案内人といったやや日陰の存在。おまけに、ウッドベースなら持ち運びも大変……。だが、黙々とベースをウォーキングさせ、バンドをスイングさせることに魂を注ぐベースマンが、一度化けの皮を剥くとももの凄い名演・名盤が生まれるのだ。このコーナーでは、そんなジャズ・ベースマンの偉業を称えるとともに、ジャズ・ベースの素晴らしさを伝えていきたい。

Victor Sproles【ヴィクター・スプロールズ】



Photo by Tom Marcello

Profile

1927年11月18日、米国伊利ノイ州シカゴ生まれ。50年代にレッド・ロドニーとアイラ・サリバンと共演し、サン・ラの『スーパー・ソニック・ジャズ』『サウンド・オブ・ジョイ』『ディー・パープル』の録音に参加。57年に『スタン・ミーツ・チェット』の録音に参加。60年にジュー・グリフィンのビッグ・ソウル・バンド、翌61年にムハル・リチャード・アブラムスのバンドに参加。64年にはアート・ブレイキー&ジャズ・メッセンジャーズに参加し、『スメイク・イット』の録音に参加。その後65年の『アー・ユー・リアル』『ソウル・フィンガー』、66年にアート・ブレイキーの『ホールド・オン、アム・カミング』の録音にも参加。また、リー・モーガンの65年の『ザ・ランブローラー』と68年の『ザ・シックス・センス』にも参加。74年にはクラーク・テリーのビッグ・バンドに参加し、パディ・デフランコの『フリー・フォール』の録音にも参加。78年にクラーク・テリーとクリス・ウッズの『スイス・レディオ・デイズ・Vol.8 - ルツェルン 1978』の録音に参加。81年に『クール・ジャズ・フェスティヴァル』のアート・ブレイキーのトリビュート・イベント“ザ・ブレイキー・レガシー”にゲスト出演を果たした。以降、晩年の音楽活動については詳細は不明だが、2005年5月13日にこの世を去った。享年77歳。

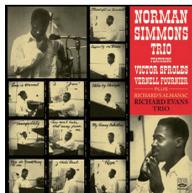
アート・ブレイキー& JMにも参加したいぶし銀のベースマン

ヴィクター・スプロールズはジャズ・ベースリストの中でも決して知名度が高い訳ではなく、知る人ぞ知る存在とも言えるかもしれないが、その個性的なプレイとサウンド、その佇まいは正にいぶし銀のベースマン。生涯、自身のリーダー・アルバムをリリースすることなく、サイドマンとしてキャリアを全うしたが、その中でも輝かしい活動のひとつはアート・ブレイキー&ジャズ・メッセンジャーズへの参加だろう。

1964年にグループに参加し、同年のアルバム『スメイク・イット』のレコーディングに参加した。その後もアート・ブレイキー&ジャズ・メッセンジャーズとしては、アルバム『アー・ユー・リアル』と『ソウル・フィンガー』にも参加し、1966年にはアート・ブレイキーのアルバム『ホールド・オン、アム・カミング』にも参加した。リー・モーガンのブルーノート作品『ザ・ランブローラー』『ザ・シックス・センス』にも参加したように、アート・ブレイキー& JMとの縁はベースマンとしてのキャリアに大きな影響を与えることとなつたに違いない。

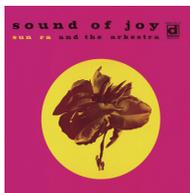
VS's Great Albums

リーダー・アルバムは残されていないが、サイドマンとしてアート・ブレイキー、リー・モーガン、ジョニー・グリフィン、アイラ・サリヴァン等のアルバムで名演を残している。



ノーマン・シモンズ・トリオ + リチャード・エバンス・トリオ (Fresh Sound : FSRCD-787)

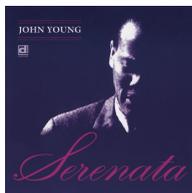
シカゴモダンジャズを代表するピアニスト、ノーマン・シモンズが1956年にヴィクターとヴァーネル・フォーニアとのトリオでレコーディングした作品。



サウンド・オブ・ジョイ サン・ラ

(P-VINE Records : PCD-22038)

1957年にトランジションでレコーディングされ、未発表のままデルマークから発売されたヴィクターが参加したサン・ラのアルバム。全11曲収録。



セレナータ ジョン・ヤング

(P-VINE Records : PCD-20232)

シカゴ出身の幻のピアニスト、ジョン・ヤングが1963年に発表した生涯最後のリーダー・アルバム。ヴィクターがベースで参加。全11曲収録。



ライヴ・アンド・ウェイリング カーメン・マクレエ

(ウルトラ・ヴァイヴ/SOLID Records : CDSOL-45262)

ヴィクターがベースで参加したジャズ・シンガー、カーメン・マクレエが1966年にNYのハーフノートで行なったライブ音源を収録。全9曲収録。